
滅びを知る者

獅子猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅びを知る者

【Nコード】

N81000

【作者名】

獅子猫

【あらすじ】

世界は進みすぎた文明により禁忌を犯した。

滅びた世界の狭間に一人の青年が漂う。

世界の真理を知り、滅びいく世界の声を聞いた青年は異世界へと飛ぶことになる。

もう二度と、過ちを繰り返さない為に。

Emeth(前書き)

稚拙な文章ですが皆さんの暇つぶしになればと思います。

E m e t h

この世界の人々は戦争を繰り返した。

その結果、科学の異常なまでの発展を起こし、ついに異世界が存在
することを付きとめた。

当たり前のように世界はまともな侵略に乗り出すことになったがそ
れは叶わぬ夢となる。

その世界の人間は奢りすぎた。

自らが最上位の存在だと疑わなかった。

神の存在を否定し人間こそが神と盲信した。

確かに「この世界」に「神」は存在しないが「監視者」は存在する。

「監視者」は世界が生まれると同時に生まれる存在。

役割はただ一つ。異世界への干渉を感じた場合にその文明を滅ぼす
こと。

そしてこの世界は白紙に戻った。

ただ一人の青年を世界の狭間に残して。

E m e t h - 2 - (前書き)

話の区切りが難しい…

E m e t h - 2 -

世界が消えた…

一瞬の光ですべてが消えた…

その中で俺は声を聞いた。

世界の声を。なぜかわからないが、世界の声だとわかった。

滅びいく中でこの世界は俺にすべてを託していった。

俺は……真理を受け取った。

この世界が生まれてから滅びるまでのすべての生命の記憶…感情…

それらが流れてくる。

涙が止まらない。頭が痛い。吐き気がする。苦しくて仕方が無い。

自分の中で感情が溢れ返る。

そして俺は叫び続けた。どうしようもないこの感情をどうにかしたくて、ひたすらに。

どれほどそうしていたかわからない。

少しは落ち着きを取り戻した俺は自分の状況を考え始めた。

周りには何もなく、宙に浮いているような浮いていないような不思議な感覚がする。

意識をすれば足場を感じ、しなければ浮いているような感覚を覚える。

「っ!!」

唐突に頭でガラスが割れたような音が響きすべてを理解した。

俺が世界から受け取った「真理」というものを。

試しに自分のいた世界で好きだった日本刀をイメージし手を一閃する。

その手の中にはイメージした通りの物が握られている。

世界の記憶を辿れば無数の剣技が浮かび上がり、そのどれもを体が覚えている為になんの迷いもなく刀を自由に扱うことが出来た。

一通り力を試したところで刀を分解し、元に戻す。

「おそらく世界でありうる事象すべてを俺は扱えるのだろうな…身体能力も筋肉というよりはイメージの具現化に近い…こう動きたいと思えばその通りに動くとは。」

独り言を呟く男は一番肝心なことを思い出す。

「そつだ……俺は……誰だ……？」

世界の記憶を受け継いだがために、どれが自分の記憶なのかまったくわからない。

とりあえず鏡を創造し自分を見る。

この体はおそらく自分なのだろうが、確信は得られない。

「……まさか」

そう呟き自分の体とは別の人物像を思い描く。

そして目を瞑りもう一度目を開ける。するとそこには…

「マジか……」

思い描いた通りの人物がいた。

ちなみにぱっと思ひ浮かんだ可愛らしい少女である。

「…俺って…なんなんだろうな…」

滅んだ世界が残した遺産。いや…世界そのものとも言えるのかもわからない。

「まあ自分が何者かなんざ考えてもしょうがない。俺は俺だ。そして…」

姿を元の形に戻し拳を握りこむ。

「もう同じ過ちは繰り返させない。別の世界を守ろう。」

幸い人外の力がある。世界そのものを相手に勝つことはまず不可能であろう。

「その為にも…この空間の主を呼ばないとな。」

空間に手をかざし、握る。するとその空間が歪み、それを一気に引き込む。

「隠れてないで出てこいよ！！」

その手を今度は押し込むように突くと凄まじい衝撃が空間を襲い揺らぐ。そして…

「NOOOOOO！」

という間抜けな声と共に猫が落ちてくる。

その光景を据わった目で見つめながら自分は椅子を用意し座る。

シュタツと音を立て着地した猫は人型へと姿を変え、透き通るような肩までの赤髪に赤眼を持ち、白いロングコートを羽織った美少年と呼べるであろう形をとった。

「おいこら！危ないだろいきなり！！普通に呼べよ！気付いてたんだろ！？」

怒りながら詰め寄る少年にも椅子を用意した男はまったく気にしたそぶりを見せずに少年にも椅子を勧める。

「ああこれはわざわざどうもご丁寧に…じゃないよ！！僕一応怒ってるんだけど！」

少年は自分に迫力が無いことはわかっているのか拗ねたようにまた詰め寄ってくる。

「すまん。お前がそんなキャラだとは思わなかったものだから。」
男としても想定外だ。

おそらく監視者であろう者を捕まえようとしたら猫から少年の姿を取り、かつ少年のような態度で怒るのだから。

「だがいつまでもこう意味の無い時間を過ごすのもあれだろう。だから本題に入りたいのだが？」

男は困ったような顔をしながら問いかける。

素直に謝ったことと、こうしている場合ではないことに気が付いたのか少年も顔をそっぽに向けながら

「まあそうだね！僕は心が広いからそれで許してあげる。で、君についてだけ…」

そう言いながらコートを引きずりながら椅子に座る。それを見て身長にあってないのかよと思いつつながら

「すまん、まず始めに聞きたいんだがお前は何者なんだ？」

とある程度は想像が付いているが聞いておく。自分に付いても気になるが優先事項は正体不明の相手についてだ。

少年は話の邪魔をされたのが不服なのか顔を顰めるが、仕方ないと咳き質問に答え始めた。

「大体想像は付いてると思うけど僕は君の世界の監視者だよ。僕ら監視者は常に世界と共にある。それが神の生み出した制度。規律。神とていくつもある世界をいちいち見守っちゃいけないから、異世界への干渉のみを禁忌としてあとはその世界に任せるんだ。そして君の世界の生命が禁忌に触れた。だから僕は監視者として終わらせようとしたんだけど……世界はそこで僕の動きに気付いたのか、すべてを君にそそぐ形で自壊したんだ。いや困ったよ。前例に無いんだもん。で、神と相談したんだけど、とりあえず君には別の世界に行ってもらうことになるから！」

口早にそういうと少年の周りに魔方陣のようなものが浮かび上がる。

「なっ!?!」

一瞬にして魔方陣が空間を覆い、暗転、次の瞬間に白光がすべてを包み込む。

声なき声を叫びながら男は消えていった。

「さて、僕も追いかけてきや。向こうの監視者や世界にはもう伝えであるから大丈夫として、まずは神への報告かな。」

そう呟いて少年がマントを翻すと空間に馴染むように消えていった。

E m e t h - 3 - (前書き)

投稿できるときに出来るだけ投稿しておこう

「…っ…！」

男は頭を抑えながら立ち上がる。

花の香りが鼻をくすぐり、芝生の柔らかい感触が男を包み込んでいた。

「くそ…いきなり飛ばすなよな。最初からそのつもりだったから良かったが…。」

体を起こし周りを見渡す。この景色が自分の記憶に無いということやはりここは異世界なのだろう。

「さて…どうするか。せめて飛ばす場所の情報くらい…っ…！」

男の中にまた情報が流れ込んでくる。

「これは…この世界の、意思か…？」

どうやら協力してもらえらしい。この世界の名前、地名や言語、文字から生命体などの情報がある。

そして驚いたのは…

「魔法があるのか。それに魔物やら魔族も…まるでファンタジーだな。」

そうして男はこの世界に意識を廻らせる。

自分の世界に無いものを確認し、それが魔法の源になるマナと呼ばれるもので、それをもちいて作られたものはマテリアルと呼ぶらしい。

「他はだいたい同じか…。魔法がある分文明レベルは低いが…異世界への干渉を行う可能性は高い…」

そう呟いた瞬間前方に揺らぎが生まれる。そこから現れたのは…

「やあ！無事着いたみたいだね。よかったよかった。」

男をこの世界に送り、元いた世界の監視者である少年だ。

「お前か。なにをしにきた？用は済んだんじゃないのか？」

「いや、僕の話聞いてた？世界と僕はいわば一心同体。一緒にいないといけないんだよ！」

そういえばそんなことも言ってたか…だが…

「考える間もなく飛ばされたからな。仕方ないだろう。で、さっそく聞きたいんだが…」

「ん？なにになに？」

「お前の名前、それと…俺の名前だ。」

男の質問にわずかばかり思考するそぶりを見せると答えた。

「僕の名前はアル・リード。アルって呼んでよ。リードは監視者のファミリーネームみたいなものだから。で、君の名前なんだけど……」
うーんと唸りながら思考する様は微笑ましい光景だ。

「君の名前は、そうだなー、君は世界そのものに近いんだ。だからあの世界の名前でもいい？」

男はなんとなくは理解していた為にしぶしぶだが頷いた。自分は世界に創造されたに近い命だ。世界の名を語るのも悪くないだろう。

「君のいた世界の名は（リロイ）だよ。この世界でも悪くは無い名前だと思う。」

「リロイ……か。まあたしかに、悪くは無いな。お前は「アルっ!!」……アルはその姿以外は人型に変えられないのか？」

途中で突っ込まれ訂正を余儀なくされたがそれは仕方が無いと割り切り、アルに問う。

さすがに子連れで旅をしていると見られるのは嫌だからだ。

「うーん、やろうと思えば出来るけど、基本的にこの姿が基本だから他の姿になるには結構負担がかかるんだよね……だから続けて大人になってられるのはせいぜい一日か二日だよ？」

「そうか……仕方が無い……」

そういうとリロイは眼を閉じ集中し始める。

そして徐々に体が変わり始め、一分もしないうちに少年へと姿を変えた。

だいたい12、3歳ほどで、髪は薄めの黒で長さは肩にかかる程度だが紐で結ばれ後ろで纏められている。目は鋭く瞳は灰色で、黒い薄手の和服を着ている。

「これでいいか…」

鏡を創造し自分を見て一人頷くが、それを見ていたアルは

「いや、目立ちすぎでしょ…」

と目頭を押さえた。

周りから見れば白いコートを引きずる赤髪の方が目立つと思うがそこは言わない大人なりロイであった。

E m e t h - 4 - (前書き)

お気に入りか…嬉しいですね。ありがとうございます。

「さて…このあとはどうするか…」

与えられた新たな情報によるとここはこの世界で最南端の無人島らしい。

一番近い国の名前はステイル。争いは無く基本的に平和な国だが、伝説で伝わるようなクラスの生命体の存在の噂が多くあるらしくあまり人が寄り付かない。争いが無いのもその為か…。

「しかしここからなかなか遠いな…。」

やろうと思えば空間も渡れるのだが、国に行けばいいというものでもない。

まずはこの世界の空気を肌で感じることも大事だ。

それと、アルからは出来るだけ能力は制限するという約束をさせられたからということもある。

干渉の許可は得ているものの、世界そのものでもある俺が全開、いや、例え一部の力でも強大なこの力を使えばこの世界が俺に呑まれる可能性があり、逆に俺が呑まれる可能性や、最悪両方とも消滅する可能性もあるらしい。前例が無い為に確かではないが起きてからでは話にならない。

この世界を守りたいと思っっている俺自身が世界を消滅させるなんて事は絶対に避けたいことだ。

「まあでもあれだよ！船とかあるし、大丈夫でしょ！」

なにやらうきうきとした様子でリロイに話しかけるアル。

「お前：楽しそうだな…」

ふふーんと鼻を鳴らし、アルはリロイに詰め寄る。

「当たり前じゃん！覗きくらいしか楽しみのない監視者から実際に体験する側に回れたんだよ！？今からしたらあれは地獄と呼べるね！うん！」

そうか：とアルをスルーながらリロイは今後の方針を話しはじめる。

「さて、俺達がいるこの島は無人島だ。人どころか魔族もいないらしい。そこでだ。俺は修行がしたい。」

真剣なまなざしを向けられ多少どぎまぎしながらアルは応える。

「ん、修行って…そんなのしなくても十分強いでしょ？僕もいるんだし少なくともこの世界では最強だよ？」

そう言うアルの頭の上には疑問符ばかりが増えていく。

「確かに力も経験も俺にはある。世界の記憶を受け継いだからな。だが、この強大な力を扱うのは初めてなんだ。いわば経験の無い新しい武器ともいえる。しかもその武器は扱い方を間違えれば世界を滅ぼすほどのものだ。修行せずに使うなんて俺には考えられない。この世界から受け取った情報から考えれば、今のところ禁忌を犯すよりも俺がこの世界を消滅させる可能性のほうが圧倒的に高い。だ

から、どこまでが安全化を見極めたいんだ。」

そこまで話すとリロイは森の中へと歩を進める。

「だが、まずは食料やら水の確保だな。創造も出来るが、それじゃつまらないだろう?。」

そう言い笑いかけるリロイにアルは笑い返す。

「まあね!せっかく体験できるんだし!でも意外と考えてるんだね
…僕も遊びは半分にしとくよ…うん」

「…半分は遊びなんだな。」

呆れたようにアルを見るリロイだが、そこには情も感じられるようになってきた。

「もちろん!せっかくだもん!楽しまなきゃ損だよ?。」

そんなリロイを感じたのかにこりと笑いかけリロイの横を歩く。

身長はさほど変わらないがややアルが小さい。

「そうだな。楽しむことも大事か。」

アルを横目に見ながら歩くりロイは植物の情報を世界の記憶から調べつつ回る。

これなら木の実には困らないだろうと予想を立てる。

「じゃあ二手に分かれたほうが効率的だよね！この森の真ん中に滝があるみたいだから日が暮れ始めたらそこに集合で！」

そういつとアルは飛び上がり空中で体を捻り方向転換をしてからもう一度飛びあがり、視界から消えていった。

「…二段ジャンプか。俺も練習しよう。」

その様子を呆然と見ながらも、漫画の知識なども応用することを固く心に決めたりロイであった。

「なんとということじゃ…」

神は驚きのあまり飲んでいた酒を零す。

今、一つの世界が自壊した。

それだけでも本来ならありえないが、さらにありえないことに世界が一つの生命体となって再誕した。

これまでいくつかの世界の崩壊を見てきたが、これは異例の事態である。

世界の創造は自分しかできないはず。たとえ変質だとしてもあまりにも…

とくとくと杯に酒を注ぎなおし、一口。

その眼は神にふさわし威厳を備え新たに生まれた生命を見据えた。

そう…でた結論は神にふさわしく…

「まあ、いつか！なるようになるじゃろ！わし、神だし。」

というものだった。

後ろでずるっという音と共に監視者が一名ずつこける。

「なにをしとるんじゃ？エル…」

多少呆れた声で話しかける神様にエルは掴みかかった。

「おい！なんだよその適当な感じ！もっとシリアスな場面じゃないのか！？まるで台無しだよ！」

怒涛の突っ込みに神はうざったそうに手を払うとエルが宙に浮き猫の姿に変えられる。

「しょうがないであろう？前例がないんじゃから。あやつには生まれてすぐにリミッターをかけたしの。世界が崩壊するほどの力はおんようになつとる。まあそれでも十分強大じゃが、下手に抑え付けて暴走でもされたらかなわんしの。」

やることはやってるのである。

「そ、そうなのか…ならいいけど…とりあえず何かあることに俺達を猫に変えるの辞めてくれよ。それ間違った力の使い方だから。」

「そのほうが可愛いからのう。まあリロイじゃったかの。そやつの監視には既にアルが付いておるし、お主は今までどおりの仕事をしとれ。」

「承知。じゃまたなじいさん。」

すたすたと四足で帰っていくエルを見ながら神は考え事にふける。

「しかし毎回思うのだがおかしいのう…監視者はみな女の子になるはずなんじゃがアルとエルだけは…」

「オーダイン様。報告が。」
突如として現れた黒装束。顔は…無い。

「どうした？お前自らとは。それと真名で呼ぶのはよせと言ったはずじゃぞ。」

「はっ。申し訳ありません。アルとエルについてですが…」

「そうか…その話は奥で聞こう。」

「はっ。」

魔方陣が輝き二人を包む。

消える間際に見せた神の顔は、なにかを悲しんでいるように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100o/>

滅びを知る者

2010年11月10日02時20分発行